J. Jpn. Soc. Soil Phys.
土壌の物理性
No. 127, p.1 ～ 2 (2014)

巻頭言
Foreword

土への思い

吉川　省子[1]

巻頭言にふさわしい高尚なことは書けませんが，土への思いを２つの出逢いを交えてつれづれに述べさせていただきます．

私の小学生時代は，学級名簿には親の職業欄がありました．「農業」よりも，わが家のように「サラリーマン（給料制の職業はまとめてこう書かれていました）」とカタカナで書かれる方が格好いいように感じていました．そのような私でしたが，農業技術研究所に就職し，「農水省の職員であるからには農業を知らなくてはいけない」という同期入省の熱い H さん（本学会員）に感化され，異動していった彼の後を継いで，日曜日に農家さん宅に通っていた時期がありました．後で考えると，農家は日曜も休めずに気の毒なことでしたし，その時の気持ちは，「･･･しなければならない」という義務感が先に立っていたと思います．その後，四国農業試験場に異動し，地域の営農に役立つ技術が求められ，農家に出入りするうちに，「生きる源になる作物を生み出す「農業」は，このうえない崇高な生業なのではないか」と思うようになりました．

さて，1 年半前のことです．私は，ある事情でパリから離れた田舎で宿を探さねばならず，たまたま通りかかったお年寄りに「Bonjour」と声を掛けると，すぐ近くに日本人の農家がある，と教えてくれました．そして，突然訪ねたにもかかわらず親身になっていろいろとアドバイスしてくださった方が，山下朝史さんでした．後でわかったことですが，「パリで生まれた世界一おいしい日本野菜（主婦と生活社）」の著者で，日本でも TV で彼の「奇跡のカブ」が紹介されていました．山下さんは，盆栽業からゴルフ教師を経て，43 才で野菜農家になり，農業の指南役の指導を仰ぐ機会も与えられず，奥さんの協力のもと，たった一人で畑に向き合い，野菜と対話をする農業を行ってきたそうです．北向き斜面の耕作不適格地と分類されるような立地と土質にありながら．その山下さんの書かれた本の中からいくつか引用しますと･･･「苗を植え付ける時に，いつも心がけていることがあります．それは『深く耕して，浅く植える』ということです．硬い地面を掘り起こし，耕すのですから，大変なのは当然です．地面を深く耕すことによって，初期の根の伸びる余地がたくさん確保され，土の中に空気がいっぱい入るのです．そこに，根を植えつけるのですが，要領はできるだけ『浅く』植えることです．浅く植えると，最初はとても不安定で心配です．最初は探るように根を伸ばしていき（見えていないので想像ですが），伸ばせるとわかると一気に四方八方に根を広げ，いつの間にかしっかりと地面をつかみ，安定します．― 中略 ―　生育が芳しくないと，― 中略 ―　これから先に根が伸びていけるよう，スコップとかフォークで根を傷めないように気をつけながら，周りの土をほぐしてやります．水や肥料はその先です．ひょっとしたら必要ないかもしれないから．」さらに，山下さんは簡潔にこう結論を述べています．「土作りの正しい優先順位は，（1）物理性 （2）生物性 （3）化学性です．」と．たったひとりで畑に向き合った人がたどり着いた，土作りで一番大切なものは，「土壌の物理性」であり，心がけていることは，「野菜の気持ちになって土壌の物理性を良くすること」だったというのです．土壌物理研究に関わる私にはうれしいことでした．私は，この出逢いを思うたび，土壌物理学会のロゴマークの良さを認識します．デザインが美しいうえに，「野菜の気持ちになって土壌の物理性を表現した」マークだと思うからです．

また，今年の春には，モグラとの旧縁を思い起こしました．例年にない積雪が解け，おそらく地温や土壌水分などの土壌物理性が彼らの活動に丁度よくなったのでしょう．自宅近くの空き地にモコモコと土の小山がライン状にほぼ一定間隔で現れ，それが日を追うごとに少しずつ延びていきました．20 年以上前ですが，私は，土壌通気性の研究に携わったのがきっかけで「土の世界　大地からのメッセージ（朝倉書店）」の「土の中は穴だらけ」という項目を執筆する機会をいただきました．そこで，私は土の模式図に，（しっかり見たことはありませんでしたが！）モグラを描きました．また，四国では，ある教授から「彼岸花はモグラを寄せ付けない」という説を聞きました．当時，私は遊休地管理の仕事に携わっていて，モグラの穴が水田の土壌侵食を助長する現場を見ていました．そのため，水田の畦に彼岸花を植えた古人の叡智を確認するための圃場試験を行いました．モグラの多い畑に彼岸花のラインを作り，片側にはモグラの食糧となるミミズの繁殖を促すように有機物を多く加え，彼岸花ラインをモグラが通過するか否かを観察しました．残念ながらその試験ではモグラが彼岸花ラインを平気で通過したため，彼岸花の効用を確認できませんでした．しかし，古から今に至る人間と土壌の深い関係に思いを馳せたことを覚えています．

[1] 独立行政法人 農業環境技術研究所

そして，先の圃場試験では生け捕ることのできなかったモグラを偶然見かけました．おそらく仲間争いで追い出されたのでしょう，死んで間もなく体温が残っているその体を触わると，まるでビロードのような手触りでした．これを知人に話すと，「柔らかく上質の光沢をもつモグラの毛皮は重宝され，20 世紀に入るまで，乗馬用ズボンやコートなど，さまざまな用途に用いられてきた」という情報を教えてくれました．土壌は食糧生産の場であるばかりでなく，狩りの場でもあったのです！ちなみに，モグラ（土竜）は，同じ字でミミズの意味もあるそうです．こうなると，彼らには，敵，味方の区別なく，「共存」という言葉が頭に浮かんできます．ミミズは朽ちた有機物を食べて土壌団粒を作り，土壌物理性を改良してくれます．そのミミズを食するモグラ，そのモグラを追い払ったり狩ったりしながら，かれらの生きる場で作物を育てて食糧を得てきた人間‥‥．土壌物理学会のロゴマークに作物だけでなくミミズやモグラなどを加えてもよかったかもしれません．もっとも，デザイン的には混沌としすぎてしまうでしょうけれど，それが土壌というもので，その混沌の中に規則性を見いだしていくことが土壌物理の目指すところ，といえるかもしれません．

2011 年 3 月の震災以降，私は，福島県内の現地試験に関わっています．採取した土壌カラムをザクッと切り分ける時，何だか悲鳴が聞こえるような気がします．農業ができなくなってしまったよ，と．土の大切さに改めて気づき，すこしずつ愛着が湧いてきます．今では，実家が農家でなかったことが残念であり，農業のための研究をしてきたならば，最後は農業に挑戦したい，そんなことを思い始めています．

追記：御存知のように，本学会誌表紙には，素敵なロゴマークが 2010 年の 214 号から入っています．昨年 224 号からは編集委員長，編集幹事の尽力で，「論文」にも「資料」にも「土粒子」にも「巻頭言」にも左上に入るようになりました！